慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	自由と規律 : 教育者としての山岸健先生
Sub Title	
Author	澤井, 敦(Sawai, Atsushi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2022
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.27 (2022. 7) ,p.32- 34
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 : 青池先生と山岸先生を悼む ~ あの頃の三田社会学
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20220702-0032

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

自由と規律
――教育者としての山岸健先生――

澤井　敦

表題は、慶大教授であった池田潔氏がイギリスのパブリック・スクールについて綴った岩波新書の書名としてよく知られている。私も慶大入学後ほどなく読んだ記憶がある。ただこの書の内容を引きつつここで何か論じたいわけではない。山岸先生について何か書こうと思った時、ふと、この書名が浮かんだのである。

山岸先生の授業を初めて受けたのは、文学部 2 年になり三田キャンパスに来た 1981 年だった。たしか「文化と社会」といった副題がついていたと思うが、その内容はいわゆる文化社会学にとどまるものではなかった。先生が板書される図は、まだシンプルな四象限図にとどまっていたものの、講じられる内容は社会学にとどまることまったくなく、哲学、文学、芸術を中心に多彩な素材が縦横無尽に次々と繰り出されるものだった。その様子はたとえて言えば、画家が自らの筆で輪郭や色彩をキャンバスに自由に描いていく様を見ている感じ、とでもいったらよいだろうか。これは先生の著作にも言えることであるが、社会学とはなんと自由な学問なんだろうと思ったものである。

その後、大学院社会学研究科に進み、山岸先生の少人数の授業に参加するようになる。基本は 1 冊の本を読んできて報告者の報告後に討論という一般的なものであったが、山岸先生が統括するというよりは、むしろ院生同士がきわめて自由に議論をする場という色彩の強いものだった。博士課程の院生たち、東大から来た自主参加の院生たち（当時山岸先生は、現象学的社会学の先駆的紹介者として知られていた）に混ざって、修士 1 年の私も言いたいことを自由に言わせていただいた記憶がある。そして議論は授業後も（山岸先生はおられない）酒場にて継続する。あの頃えた刺激、議論することの面白さの感覚は忘れがたい。

またある日の、修士課程の学生だけのごく少人数の授業で先生は、ベラスケスの絵画「侍女たち」をコピーしたものを配布され、この絵を見てどう思うか問われた。この絵は、フーコーが著書『言葉と物』で取り上げたことでも有名なのだが、当時の私はそれを知らずひたすら絵を睨みながらとにかく何か言っていた。ただ、山岸先生はフーコーの議論やその他の既存の解釈を「正解」として示されることもまったくなかった。ある意味、不思議な授業であるが、むしろ自由に発想すること、その発想を自由に膨らませることの大切さを教え、また、先生ご自身もそれを聴くのを楽しんでおられたように思う。

修士 2 年になって学部からの指導教授である横山寧夫先生の退職にともない、山岸先生に指導教授をお願いすることになった。これまで自由、自由と書いてきて、確かにそうなのだが、同時に先生は、たとえば論文の作法といった形にはとても厳しかった。そしてこれは学問だけでなく、人としての礼節においても同様である。礼節案件で、先生から怒られたことのない弟子筋の者はたぶんいないと思う。とはいえ先生は、厳格な顔と同時に、とても温かな顔をお持ちであった。博士課程進学の語学試験で思わぬ失敗をしでかし、不合格で 1 年浪人することになってしまった時も、合否判定会議の翌日に先生にお会いしたのだが、「人間考えすぎると眠くなるもので、私は昨日一駅寝過ごしてしまいました！」と仰り、思わず謝ってしまったのだが、その後の浪人期間も親身にサポートしてくださった。

澤井敦「自由と規律――教育者としての山岸健先生」『三田社会学』第 27 号（2022 年 7 月）32-34 頁

人生おもしろいもので、浪人明けて博士課程進学の 1 年後、たまたま見た教員公募に試しに応募したところ話が進み、1988 年、秋田経済法科大学（現ノースアジア大学）に就職することが決まった。その 5 年後の 1993 年、山岸先生のサポートもあり、大妻女子大学短期大学部に移籍することになる。その頃同時に、社会学研究科に博士論文を提出するお話もいただき、山岸先生に主査をお願いし、1995 年、無事学位取得に至った。三田キャンパスで行われた学位授与式の日、山岸先生も授与式にお出でくださった（三田の教員になってから自覚したが、指導教授の参加は珍しい）。さらに、先生がお好きなイサム・ノグチの彫刻「無」（三田キャンパスにある）のパステル画（先生作）を額装したもの（横 41 ㎝ 縦 52.5 ㎝）を記念にとお贈りくださった。この時、先生と二人で撮った写真があったはずで今回掲載したく家中探したのだがどうしても見つからず、代わりに出てきたのが、当日、三田研究室棟 1 階談話室での私と私の家族の写真、山岸先生が撮って下さった写真であった。

1999 年、大妻女子大学多摩キャンパスに人間関係学部（社会学、社会心理学、社会福祉学の各専攻がある）が新しく開設されることになり、その学部長に就任される山岸先生にお声がけいただき、私も短期大学部から移籍することになった。学部開設の準備過程には、私も数年前から参加させていただいていたのだが、実は少し心配があった。私にとって山岸先生はやはり先生であり同僚ではない。また、学部長を務められる山岸先生というのも想像しにくかった。すでに大妻にいるのでわかっていたが、大妻の学生と慶応の学生もいろいろと違うのである。どうなるんだろう、とやや心配だったが、これは杞憂であった。

同僚となられても先生は特にお変わりなかった。というか、これは院生の頃から山岸先生が、基本的には同僚に接するように接してくださっていたのだということに、今さらながら気づいた次第である。また、人間関係学部の学部長はまさに嵌まり役であった。たとえばまだ高校卒業したばかりの女子学生たちは、寄り集まれば式典などでもおしゃべりが出てしまう。そのような時、山岸先生は、しっかりとお叱りになった。ただそれは上から頭ごなしにという感じではなく、いわば祖父が孫を叱るような感じである。そして一声、「新入生の皆さん、多摩のアクロポリスへようこそ！」[1)]。学生たちは、「多摩のアクロポリスってどこだ？」「アクロポリスって何だ？」となるが、なんとなく先生の言うことを聴いてしまうのである。授業での山岸先生も自由度は増し、かつての四象限図も、はるかに複雑な、もはや絵画というべき図となり、そうした資料を複数枚配布される学生は当初「？」となるのだが、結局「なんかおもしろい」と聴いてしまうのである。

山岸先生は、一方で叱るべきところはきっちり叱り、他方では学問の自由なあり方を示し、そんな先生を総じて学生たちは慕っていたと思う。なにより山岸先生は多摩のアクロポリスで学ぶ学生たちがいかに素晴らしい場で学んでいるか、そのことを絶対的に肯定し、いろいろと迷いのある学生にも大きな自信をあたえていたと思う。学生に慕われ同僚にも信頼され、山岸先生も幸福な、充実した時間を過ごされたのではないかと思う。

山岸先生が強い情熱をもって開設に尽力された人間関係学部も軌道にのり、最初の卒業生を送り出した頃、慶應義塾大学法学部政治学科から移籍の話をいただいた。まだ人間関係学部がやっと完成年度を迎えようとしていた時期で、しかもその創設メンバーとして選任いただいた私が、慶應の、しかも出身の文学部とは異なる別筋からのオファーを受けてしまったとして山岸先生はいったいどうお思いになるか、心配だった。移籍の話も決まった後で、怒られるのを覚悟で山岸先生に謝罪を兼ねてお話をした。先生は、一声、「こんなめでたいことはありません！」と言ってくださった。

2004 年に慶應に移籍し、2009 年から 2 年間、オーストラリアに在外研究に出していただいたりもした（ちなみに 2 年の滞在中、日本から届いた手紙は、高校時代からの友人と山岸先生からの 2 通である）。2016 年 11 月、山岸先生ご病気の報を受け、兄弟子にあたる文学部の岡原正幸さんと二人でご自宅にお見舞いに行こうという話になった。お会いした山岸先生のご様子はあまり変わらず、というかとてもお元気で「今日は我が家に慶應の教授が 2 人も来てくださいました！」と、たいへん喜んでくださった。どんどんお話されるので、二人が話を差し挟むのもたいへんだったほどである。先生は、ご自宅への行き方帰り方もきっちり指示してくださり、二人ともそれにきっちり従った。

2017 年秋、75 年近い歴史を持つ慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所（通称メディアコム、旧新聞研究所）の所長に就任することになった。メディアコムには研究生制度があり独自のコースが設置されている [2)]。就任 1 週間後ぐらいに開かれた OBOG・研究生双方が参加するイベントの懇親会で、最年長に近い OB の方とお話していたところ、自分はメディアコムで山岸先生の同期だったと仰る。確かに研究所が 1996 年に出した『新聞研究所五十年史』という書物に掲載されたいくつかの写真を探すと、そのひとつ、修了式の集合写真に山岸先生のお姿がしっかり写っていた。その後、その OB の方が、私のことを先生に伝えてくださり、山岸先生もとても喜んでくださったようで、晴れやかな祝福のお手紙をお贈りくださった。

そこはかとなく思い出話をいろいろと書いてきたが、このように書いてくると、大学人としての私の道のりには、山岸先生が、教育者としていつも伴走し、励まし、サポートしてくださっているように感じる。

ほぼ家族葬、コロナ禍初期ということもあり、慶應からは岡原さんと私が代表でご葬儀に参加させていただいた。岡原さんが「メディアコムの所長の名刺持ってるか」と言われ、岡原さんの社会学研究科委員長の名刺と一緒に御棺に入れさせていただいた。本当は直接名刺をお渡ししたかった。後悔先に立たずである。

【註】

1) イサム・ノグチが三田キャンパス（三田の山）を「アクロポリス」と呼んだという話があり、まずはそこに由来する。また大妻女子大学多摩キャンパスは、最寄り駅である小田急線唐木田駅の改札を出て見上げると、前方の少し離れた小高い丘の上に、確かにアテネのアクロポリスのような姿を見せている。そうしたことから山岸先生は「多摩キャンパス」という語はほとんどお使いにならず、常に「多摩のアクロポリス」という言葉を使われていた。

2) メディアコムは現在、毎年年末に、研究生となる学生のための入所試験を、1・2 年生を対象として行っている。様々な学部から志願者が集まり、その倍率は 2〜3 倍の狭き門となっている。

（さわい　あつし　慶應義塾大学法学部）